信徒数の大幅減

～上五島・長崎巡礼⑳～

長崎は日本のカトリック教会の「信仰のふるさと」と呼ばれ、県内に百三十七もの教会がある。この中の五十一教会が隠れキリシタンが潜んだ地として有名な五島列島に集中している。

今回は新上五島町の二十九教会のうち、十八教会を訪ねた。その巡礼記を書くために使用した資料は長崎教区が平成元年に発刊した「長崎の教会～キリシタンの里をたずねて」という本である。

平成元年の資料では多少古いが、その後に改訂版も出ていない。激動の昭和時代ではなく、日本が安定した平成の時代での資料なら、発刊から二十年余り経過しているとはいえ、現状とそう大差はないだろうと思っていた。

ところが今回、現地を訪れて調べた信徒数などとの差が余りに大きいのにがく然とさせられた。日本全体で少子・高齢化や地方の過疎化が進んでいるので、いくら信仰のふるさととはいえ、信徒数は多少減少しているだろうと予測はしていたが、私の予測の範囲をはるかに超えていた。

すでに紹介した青砂ケ浦教会、鯛ノ浦教会とともに上五島で最も古い歴史を持ち、中心的教会である大曽教会の具体的数字で比較する。

明治十二年に最初の教会が建てられ、大正五年に現在のレンガ造りの教会に建て替えられた大曽教会は、本州とは反対の日本海側の青方湾入り口の岬に建てられている。開拓移民として隠れキリシタンたちが住み着いた時は相当のへき地であったことが容易に想像できる。

平成元年の世帯数は二百十四、信徒数は千百八十人であった。それが昨年訪れて調べた数字は世帯数百二十八、信徒数は二百九十六人。平成になってからの二十年余で信徒は約四分の一に激減している。二十九教会の一つ、北部の曽根教会の巡回教会、大浦教会は教会自体が消失しているのは特別としても、どの教会も信徒数は大幅に減っている。

これはカトリック教会だけではなく、現代社会の宗教離れの影響とも考えられるが、長崎の教会は過去の遺産が大きいだけに現状との差が目立つのは事実である。

上五島地区長の浜崎神父は「少子・高齢化の上、高校を卒業すると若者は島を出て、高齢者ばかりになっている」と嘆かれる。

不当なキリシタン弾圧が故に栄えた五島の教会。平穏な今、信徒数は激減した。これは五島に限ったことではなく、日本の教会が、いや日本という国が直面している大きな問題ではないだろうか。

なお、昭和三十五年に大曽教会の巡回教会として島の中央に建てられた青方教会は、平成十五年に建て替えられ、現在、上五島の中心教会である。ここだけは迫害の時代に関係もなく、交通の便も良い所なので信徒数は平成元年当時よりも増えているだろうと期待をもって調べたのであるが、新設されて五十年の青方教会も平成の二十年余りの間に信徒数は半数近くになっていた。

信仰のふるさとと呼ばれる長崎での信徒の減少は、いくら現代社会の傾向とはいえ、寂しい。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

あと5年で献堂100年になる大曽教会

今は上五島地区の中心である青方教会